

ピクトリアについて

後期ルネッサンスを代表する作曲家のひとりトマス・ルイス・デ・ピクトリアは、1854年頃スペインの中部のカスティリャ・ラ・ビエバのアビラの司教管区で生まれました。

ピクトリアは生涯20曲のミサ、40曲のモテトゥスをはじめ全部で180篇ほど作曲していますが、1560年にフェリペ二世から認可がありてローマを訪ずれることができた彼はイエズス会の神学校コレギウム・ゲルマニクムにはいりました。

彼はサン・タポリナーレ教会の聖歌隊指揮者となる以前に、すでにフランス・フランドル楽派の線に沿って豊富な音楽を受けていたに違いないのです。しかし深い宗教精神から、1578年ローマ市内のサン・ジロラモ教会に引きこもり平の司祭となってしまうのでした。ここで彼の作品の中でも感動を呼ぶ「聖週間聖務曲集(1585年)」、「死者のためのミサ曲(1583年)」を作ったのです。

ピクトリアは満ちたりた生活の中にもスペインへ帰ることを念願し、1585年頃祖国スペインの地をふむことができました。スペインではマドリードにあるデスカルサス・レアレス修道院で余生を送っていた皇太后マリアと、その令嬢マルガリータに仕えながら名儀樂長、オルガニスト司祭として暮らしました。

さて、今回演奏する「聖木曜日のレスポンソリウム」ですが、「聖週間」とは教会暦で、復活祭に先立つ一週間のことをさします。これは言うまでもなく、信徒たちがキリストの殉難をいたみ悔悟にくれる週間であります。

ピクトリアは聖週間のうち特別な祭礼の行なわれる「枝の主日(復活祭より一週間前の日曜日)」「聖木曜日」「聖土曜日」のために18曲のレスポンソリウム、9曲のレクツィオ(エレミア哀歌)、マタイ伝とヨハネ伝による二つのパッショ(受難曲)など全37曲を書きました。

レスポンソリウムのテクストは、いずれも聖書の断片あるいは、その要約が使われておりユダの裏切りによって十字架上の死に向うキリスト的心情を、信徒の悔悟をこめてせつせつと綴っています。その心情、あるいはほの暗く劇的な情景をピクトリアの筆がいかに描き出してゆくか、またそこにどれほどの祈りがこめられているか、余計な注釈の言葉は、もはや要らないでしょう。

—oo*oo—

佐々木基之著

『耳をひらく』 —人間づくりの音楽教育—

音楽によって万人を幸福へ導く独特の教育法を創案した著者が“分離唱”的指導法を述べる。音楽早期教育に悩むお母さんや、音楽大学生にとっても福音の書であり、音楽に関心のない人も楽しく読める。(1,600円 ￥200円)

〒102 東京都文京区千駄木2-8-3

TEL 03-827-3431 振替 東京 0-33724 柏樹社
(梨大合唱団でも、お取次ぎいたします。)